

## 10日目 掛川 -> 袋井 -> 見付 -> 浜松

10日目は6月5日(土)、掛川駅を朝6時にスタート、雲一つ無く晴天、朝から暑い。  
掛川の街は旧東海道を中心にして繁華街となっている。 繁華街とは云え、モーニングサービスの喫茶店も、24時間営業のファミリーレストランも無く、朝食はコンビニのお握り。  
いつものお供のFMラジオは全く聞こえず、この辺りは電波が弱いのか、その後も何度か試したが小さなラジオのアンテナでは1日中FMは受信できなかった。 それではとミュージックプレイヤーに切り替えて、本日のオープニングはスタン・ゲッツでジャズ。

### 掛川宿 26番目

古い蛇腹のカメラ



宿場の入り口付近に「7曲がり」と呼ばれる通り道路があり、これは道路をわざとジグザグにして外部からの攻撃に備えたもので、掛川宿が単に宿場町だけではなく、藩主の住んでいる城下町でもあることを示している。しかし、ジグザグの細い道路があるのみで、上空からヘリコプターか何かによって見下ろすのでもない限り、その写真は撮れない。 と考えながら歩いていたら、その一角に写真屋があり、ショーウィンドウに古い木製蛇腹式(最近の若い人は「蛇腹」が分かるだろうか?)のカメラが飾ってある。 カメラの後に黒い布のフードがついていて撮影する人がそれを被るプロ用のもの、最近見かけないものの一つ。

### 掛川城

更に歩くと、城の玄関となる大手門があり、この辺りから見る掛川城は朝日にその天守閣が映えて美しく、城へ寄り道することにし、大手門をくぐり、いざ登城。

朝日に輝く掛川城



大手門



城内には赤い橋のあるきれいな池があり、池の中に花を浮かべてあって、石の上で鴨が日向ぼっこ。城内は散歩やジョギングの人が大勢おり、朝の挨拶を交わして天守閣の門までたどり着くと、開門は9時でクローズ、天守閣見学は断念して下城。説明板によれば大手門も天守閣も最近復元されたものとのこと。

掛川城の池と橋



石の上の鴨



札差と山内一豊の妻

町中の道路を歩いていくと、これが銀行とびっくりするようなしゃれた建物がある。外観は江戸時代の商家風、「うだつ」もあがっていて、看板には「札差」と書かれ、壁に山内一豊とその妻千代の浮き彫りがある。掛川城は戦国時代末期には徳川家康の城だったが、秀吉による家康の関東移封後は山内一豊が城主となったとのこと。但し、山内一豊も関が原後に土佐へ移封となる。

札差の看板



山内一豊とその妻千代の壁画



繁華街を通り過ぎ、郊外へ、ガイドブックに平将門の首塚と書かれている「十九首塚」を探すが見つからず、早朝散歩の人に聞いて住宅に囲まれた塚にたどりつく。



19 首塚

十九首塚の墓



平将門は首が19もあったのか、東京の大手町にも平将門の首塚があるので合計20か、平将門はヒドラか、等と勝手に突っ込みを入れつつ塚の説明文を読むと、平将門以下19人の負将の首をここまで運んで確認を行い、この地に埋葬したとのこと、墓そのものは最近作ったもので真新しい。

仲道寺

掛川宿と次の宿場袋井との間は10Kmあり、特に名所旧跡の無い道をひたすらに歩くと、やがて善光寺にたどりついて一休み、この善光寺は東海道の丁度真ん中にあたるということで仲道寺と呼ばれている。

仲道寺の標識



名栗の花莫産の絵と説明



合いの宿 原川

仲道寺を過ぎると間の宿の原川となる。間の宿とは、宿場間の距離が長い時に中間地点に置いた休憩所で旅籠は禁じられていたとのこと、旧東海道の松並木が美しく保存されている。遺跡は無いが、そのかわりに、現代の旅人用の面白いものが作られている。一つは駕籠の形をした建物の側面に、「名栗の花莫産」の浮世絵と説明、この地は名栗と呼ばれ、花莫産の産地として有名だった。膝栗毛には、「はやくもなぐりの たてばにつくここは花ござをおりてあきなう道ばたにひらくさくららの枝ならでみなめいめいにおれる花ござ」とある。

ごみ捨て禁止のごみ箱と絵



もう一つは、浮世絵を側面にしたゴミ箱、ゴミ箱なのに「ごみ捨て禁止」とはこれいかに、と突っ込みたくなる。

原川、名栗を過ぎると、袋井の宿場のはずれとなり、ここの妙日寺に日蓮上人の両親の墓があるとのこと、寄道。説明板によれば、日蓮の父の法名が妙日で、それを寺の名前としており、この寺の地が代々の邸宅跡で、源平合戦時に平氏に味方した為に鎌倉幕府から千葉に流され、その千葉で日蓮が生まれたとある。

寺の中の更に石堀で囲まれた一角に日蓮上人の両親と先祖の墓、柳生但馬守寄進の五輪塔があった。



と言うことは、柳生但馬守は日蓮宗?、色んな時代小説で柳生但馬守は登場しているが宗派について書かれたものは記憶に無い。寺の中に「百度石」があり、初めて見たのでインターネットで調べると、100回お参りして祈願する場合、「百度石」があればそこを基点として本堂までを往復するとのこと、又一つ勉強した。

どまん中東小学校の正門

柳生但馬守寄進の五輪塔



どまん中 小学校

この妙日寺の隣に小学校があり、看板にはなんと「どまん中」東小学校の文字。袋井宿は、53次の27番目、つまり真ん中の宿場なので別名「どまん中」宿場だとか。とは云ってもここはまだ田植えの終わった田んぼが広がる宿場のはずれ、道を急ぐ途中で、かつてニュースで主役となっていた会社の広告タワーを見て思わず写真。

袋井宿 27番目

袋井の宿場に到着、街の中に「どまん中茶屋」があり、旅人に無料でお茶や菓子の接待をされていて、その茶屋で休憩、聞けばボランティアで宿場の案内をしているとのこと、特に今日は地域主催のウォーキングの行事開催中とのこと、お茶二杯を飲み煎餅を食べ、観光地図をもらい、看板「娘」と写真を撮って再出発。

シンドラーのエレベータ

どまん中茶屋で看板「娘」達と





袋井宿はどまん中茶屋以外にも休憩所があり、案内・標識が多く、旅人には親切な宿場だが、遺跡そのものは少ない。街中を通り抜けて郊外にでると、木原権現神社があり、木原畷古戦場跡の碑がある。武田信玄と徳川家康が戦い、家康が大敗した「三方が原の戦い」の前哨戦としてこの木原畷で戦いがあったとのこと。徳川家康が戦勝祈願した時に腰掛けたという「徳川家康腰掛の石」がある。

#### 狛カエル

この神社に、通常であれば狛犬が置かれている位置に、蛙の石像が置いてあり、珍しい狛蛙と思わず写真、近くに「平和 50 年を迎える(6 蛙)」と書かれており、戦後 50 年の平和を記念して作られたものらしく、背中を合わせると全部で 6 匹の蛙でしゃれになっている。お見事、拍手

木原畷古戦場碑と徳川家康腰掛の石



狛犬ならぬ狛カエル



歩いていくと、市指定天然記念物の大楠との案内板、大木オタクの影響を受けているので、これは写真を撮るべしと寄り道。

須賀神社の大楠

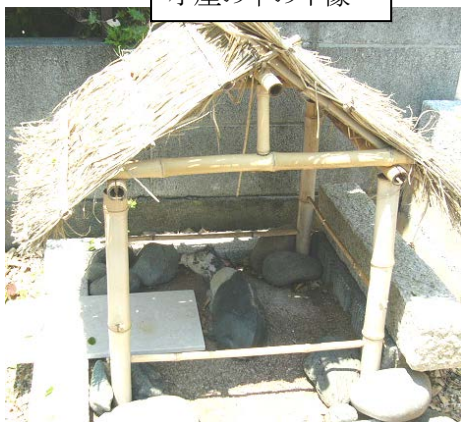


須賀神社と云う小さな神社の境内に、根元の幹が非常に大きい楠木があり、幹には穴が開いていて蛇でも棲んでいるような雰囲気、「樹高 15m、枝張り 25m、幹回り 9.5m、樹齢推定 500 年」とある。

袋井を後にし、太田川を越え、次の宿場の見付を目指す。途中で、鎌倉時代の道、江戸時代の道、明治時代の道、大正時代の道があり、明治時代の道を選ぶ。

見付宿 28 番目

小屋の中の牛像



と言っても舗装された車が通う道をたどり、見付宿となる。

京から江戸に向かう旅人が始めてこの地で富士山を見付けるので「見付」の名がついたとのこと、ほんまかいなと言う気もするが。現代ではジュピロ磐田の磐田市といった方が分かり易い。

普通の家の中の庭の、道路に面して、高さ 50cm 程度の 4本の柱の上に 50cm 四方のわら屋根を載せた小さな小屋があり、中に小動物がうずくまっている。足を止めてよく見ると、角の欠けた小さな牛の石像、一体これは何だろう。人が居れば聞くと、誰も見かけず謎のまま。

あと押し坂



悉平太郎



見付天神と悉平太郎

見付の宿場にはいると最初に現れるのが見付天神の旗、観光バスから団体さんが降りてきて脇道にはいっていくので、後に続く。最初の鳥居をくぐると急な坂道となり、名づけて「あと押し坂」、その坂を上がると「悉平(しっぺい)太郎」の名の犬の像がある。昔、怪物がいて、人身御供をしていたが、ある時、信州から犬の悉平太郎を借りてきて怪物退治をしたとのこと。因みに、怪物は年経た巨大な狒々だったとか。その犬を祭っている霊犬神社があり、我家の老犬の長寿を祈って犬のお守りを求める。

鳥人幸吉の墓



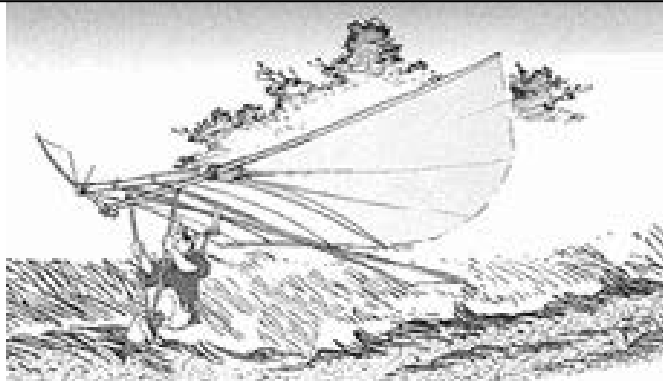
鳥人幸吉

見付天神を出て、街中を歩いていくと、右に曲がれば大見寺、良純親王と飛行家幸吉の墓と書いてある。ガイドブックには良純親王としかなかったので、xx親王に興味は無く(良純親王ごめんなさい)、パスするつもりだったが、飯嶋和一の小説「始祖鳥記」を読み、世界で最初に空を飛んだとされる日本人の名は記憶にあり、「人生をかけて飛ぶことに挑戦しつづけた鳥人幸吉」に敬意を表して寄り道。大見寺は小さな寺で、寺内に新旧の沢山の墓があつて何の標識も無い為、どれが鳥人幸吉の墓か分からず、やむなく、寺の外で作業をしていた人に聞く。鳥人幸吉の墓石には、どんな云われか分からないが、1円硬貨が沢山積まれており、ポケットに1円玉は無かったので10円を供え、冥福を祈って合掌。



この鳥人幸吉の本名は浮田幸吉、備前岡山の表具師で、鳥の飛行を研究して凧とグライダーを一緒にした様なものを作り、実際に空を飛んだが、幕府におかしい奴と捕まえられ、打ち首のところをこの地に流されたとのこと。

インターネットにあった鳥人幸吉の「飛行機」の想像図



時は天明五年（1785）、ドイツ人のオットー・リリエントールが1891年に同じような飛行装置で初飛行に成功したのは鳥人幸吉の初飛行より100年後となる。江戸時代の日本にこんな人がいたなんて嬉しいな。そう云えば、昨年は中止の琵琶湖で開催される鳥人間コンテスト、今年が開催されるのだろうか。

### 旧見付小学校

見付には、明治8年建造、現存最古の小学校である旧見付小学校があり、寄り道して見学。5階建ての白亜の建物で、地元の篤志家の寄付によるもの、このような小学校を建てた明治の人の意気込みが感じられる。

旧見付小学校



見学科は無料で、見学ノートに県内か県外かと名前を書き、パンフレットをもらい、靴を脱いで、スリッパに履き替えて建物の中にはいる。中には明治時代の教室が再現され、袴姿の先生が着物姿の生徒を教えている人形がある。教室の小さな机は黒光りし、机の上には「尋常科用小学国語読本」がおかれ、その脇にはノート代わりの石盤と石墨、壁にはイロハ図。又、黒い足踏みミシン、黒い扇風機、炭を入れるアイロン、一目みて用途の分からないもの、等の明治時代の色んな文物が展示され、資料館にもなっている。

国語読本と石盤、石墨



国語読本の内容



珍しかったのは香時計、香を燃やして時間を計ったらしい。江戸時代は歴史上の世界であり、現実感はありませんが、明治時代となると、もちろん戦後世代の直接的記憶にあるはずはないが、まだ記憶に残る祖父母が生き、青春を過ごした時代であり、何となくノスタルジアを感じさせる。その時にミュージックプレーヤーから流れる音楽は、Y氏寄贈CDの、カルメンキャバレロのピアノによる日本の叙情曲となり、宵待ち草、赤とんぼ、浜千鳥、朧月夜等でまさにグッドタイミング、セピア色の光景が広がってゆく。

昭和6年の夏休みの友



香時計



昭和初期の「夏休みの友、冬休みの友」も陳列。いつも8月31日に「夏休みの友」を慌てて書いていたが、こんな昔からあったのか。

本日の昼食は天竜川を越えて、浜松に渡ってうなぎを食べる予定をしていたが、寄り道が多く、磐田駅の近くで12時。うなぎ屋を探すも見つからず、居酒屋風の店でカツ煮定食の昼飯と休憩。

## 天竜川

ゲームセンター上の恐竜



昼食後は、遺跡は何もない旧東海道を2時間ほど歩いていて天竜川河畔へ到着。途中で、民家の屋根の上に首を出した恐竜を見てびっくりしたが、近づく、ゲームセンターの上に作られたものと判明。

前回の太井川に続いて大きな川の川越となるが、太井川と異なり、天竜川の遺跡は少なく、見かけたのは「天竜橋跡」の石碑のみ。明治になって作られた木製の橋があり、全長1163m、通行料として橋銭(はしぜに)を徴収、鉄橋完成で取り壊したとのこと。

今は50m程の間隔で2本の橋があり、どちらを渡るか迷ったが、歩道の大きい新天竜川橋を渡ることにする。

天竜川に掛かる2本の橋、右側の橋を歩いた



橋の上は強風が吹き、飛ばされそうな帽子を手で押さえて歩く、風の影響が満ち潮なのか分からないが、川面の波は下流から上流へと向かっている。川の水量は大井川よりも天竜川の方が多様な気がする。橋の長さは912m、大井川の1000mよりは短いものの、やはり長い。



金原明善

天竜川を越えたところに休憩所があり、一休み。 その休憩所にはこの付近の旧東海道の遺跡案内のパンフレットが置かれていて、それによるとこのあたりは中野町。 明治天皇玉座跡、船橋跡、木橋跡があるが、いずれも碑のみなのでパスし、「嵐山光三郎ゆかりの医者」なるものに直行、作品を読んだ記憶は無いが、作家嵐山光三郎は知っている。 嵐山光三郎はこの地で生まれ、実家は医者を開業中。 その先に「金原明善」の生家とある。 名前に記憶があり、資料館を覗いたところ、明治時代に、天竜川の治水や植林に力を注いだ篤志家。 小学校の頃読んだ偉人伝に、二宮尊徳などと並んで名前があったのを思い出す。 地元では今でも郷土の偉人として教えているらしい。

この辺りは、行政的にはすでに浜松市、天竜川駅に3時半にたどり着く。 ここから浜松駅までは1時間程だが余裕を見て本日はここでストップ。

10日目は6万歩では約35Km、山道、坂道、峠道は無く、今迄が一番ラクだった。

今回も東京駅八重洲口を深夜12時に出る夜行バスに乗り、朝の5時に掛川着、帰りは天竜川駅からJRで静岡、静岡から午後6時発の高速バスに乗り渋谷に午後9時帰着。

次回は 浜松 -> 舞阪 -> 新居 -> 白須賀

10日目

